

故白鳥
藤崎 兩理事追憶學術講演

第一講 支那思想と天文学

學習院名譽教授
會員 文學博士

飯 島 忠 夫

支那古代の天文学の研究に、私が志を起したのは、故白鳥博士の慫慂によつたので、その研究中には多くの啓發を蒙つたことがあり、その結果を纏めた「支那古代史論」が東洋文庫から出版せられたのも、亦同博士の力に依つたのであるから、本日この同博士の追悼會に於て、支那思想と天文学との關係を陳述するの機會を與へられたことは、私の大なる光榮として、感激に勝へない所である。

さて、支那古代の文化を知り、支那思想の源流を明らかにすることは、日本人が支那を理解するについて、尤も必要なことである。それが爲には、先づ儒教の經典について充

分の研究を行はねばならぬ。私が支那古代の天文学を研究したのは、儒教經典の成立年代を論定する爲でもあつた。支那では、宋儒以來清朝の考證學者に至るまで、經典の成立年代について、常に議論が試みられて來たが、まだ徹底したものとは言はれない。私はそれを徹底させる爲には天文学を用ひねばならぬと思つた。そして、すべての主觀的の束縛を離れて、純然たる客觀的態度を取つた。それは、明治天皇の教育勅語を以て最高經典とする日本人に取つては、儒教經典に批評的研究を加へることについて、何等の躊躇すべき理由がないと信じたからである。

私の支那天文学研究の結果を述べれば、支那で天文学が飛躍的に成立したのは、戦国時代の初期であつた。それは、皇紀三百年前後に當り、西紀前三百五十年前後に當る。その理由には凡そ三條がある。

一、黄帝の時代に造つたといふ最古の曆法の基礎となつた太陽と月との位置の實測の年代

二、支那の記録にある最も古い冬至點即ち冬至の日に太陽が居るやうに見える星座上の位置の實測の年代

三、この古曆と結合する木星紀年法の根據となつた木星の位置の實測の年代

これらの年代が皆、戦国時代の初期に集中して居ることが、現代天文学による計算によつて知られたのである。その決定の方法は、古曆で用ひる數が、一年の日數を三百六十五日四分の一とし、十九年の日數を二百三十五日の日數と一致するものとし、木星の週期をば十二年とし、十九年に七個の閏月を設けることとなつて居て、眞の數で、一年を三六五、二四二日とし、一月を二九、五三〇五八八日とし、木星の週期を一一、八六二年とするものに比して、何れも稍超過して居るので、年を経るに従つて、曆と實際との間に、漸次に狂ひを増して來るのであるから、その曆法

が適用された曆日記事の漢代の歴史に載せてあるものを取つて、それを現代天文学の計算法によつて得た日月木星の位置に照して、その狂ひの程度を考へ、そこから遡つて、狂ひの生じて居ない年代を捕捉し、それを以て、實測の行はれた年代としたのである。

そこで、支那曆法の性質を古今に亘つて考へて見れば、東晋時代までの間に存在した數種の曆法は皆この古曆の週期を本として、それに多少の調節を加へたものであり、それより以後のものは、南北朝から唐宋までには印度、元明にはアラビヤ、明末から清へかけては歐羅巴の影響を受けて變遷して居て、支那の獨創的發展として見るべきものは殆ど無いのであるから、この戦国時代の曆法もまた或は西方からの影響によるものではなかつたかと注意して見る必要が起る。その結果として、この飛躍的成立がまた西方からの影響によるものであつたことが、次の三條の理由によつて知られるのである。

一、戦国時代に於ける東西交通の可能

二、古曆の計算法は、西紀前三三〇年を、その第一年とするところの、ギリシヤのカリポスが考案したといはれる曆法と同一の數を用ひ、この兩者の基礎となつた

實測の年代もまた同一であつたと推定されること

三、支那の記録の上に存する最古の冬至點は牽牛初度となつて居て、それはまた、バビロンで前四世紀の初に決定された牡羊座の上の春分點から、恰も九十度を移したところにあつて、それと同一年代の冬至點であるから、その轉換が容易であること

なほ、この他に次の理由を附加することが出来る。

四、印度の木星紀年法の成立年代として、自分の推定したものゝが、支那の木星紀年法のそれと一致すること

印度、ギリシヤの天文学は、バビロン天文学の派生であつて、カリポスの曆法も、その本はバビロンにあつたと認められるから、支那の天文学も亦バビロンから來たものと言ふことが出来るであらう。これは、東西交通の關係から見て、此の如く考へるのがよいやうである。

そこで、儒教の經典なる易經詩經書經禮記春秋等に充滿して居る天文学的事項を點檢すれば、みなこの戰國時代の天文学の反映したものとして解釋することが出来る。そしてこの時代より古く出來た天文に關する學術的智識と決定せねばならぬ資料は一も存することがない。但し天文に關する原始的智識がその以前に存在して、原始的曆法があつ

たかも知れぬが、その方法は全く傳はつて居ないのである。これは實に驚くべきことであつて、孔子の時代にはまだ後世に見る様な經典は出來て居なかつたのである。元來、儒教の經典の中で最も古いものとされて居る易經詩經春秋は、皆孔子が古來の資料によつて編纂したものとしてあり、清朝の末に出た公羊學者はそれを孔子の編纂とせずして、孔子が創意を加へた著作としたが、私の見る所では、孔子以後の儒者の著作と考へるより他はないことゝなつた。その成立年代は孟子の時代に合するのである。

さて、支那の天文学は、今の所謂天文学ではなくて、占星術である。それは、西洋の天文学が今から數百年前までは占星術であつたことゝ同一である。占星術は天文と人事とを譬喩的に連結して、天文の變化を以て人事の吉凶を占ふものであつて、これはアジヤ、歐羅巴を通じて古代から行はれて居たもので、西方ではバビロンがその發生地として知られて居り、今日に於ても、尙西方にその名残を留めて居る。私の考へる所では、支那の占星術もまたその餘波であらねばならぬ。この譬喩的推定法はまだ論理的のものではない。

それ故に、今の科學には容れられないのである。しか

し、世界における古代思想を研究するには、この占星術が如何なるものであつたかを知るべき必要がある。そして又、世界に於ける科學發達史の冒頭となるべきものである。

天文学には理論の部門と曆法の部門とがある。曆法作成の年代は曆法の研究によつて把握される。そしてこの二つの部門は相提携して發達すべきものであるから、理論の成立年代もまた曆法の成立年代によつて決定し得るものがあるべきであらう。

支那天文学の理論の部門は太極陰陽五行の説である。史記の曆書には、昔し黄帝が星歴を考定し、五行を建立し、消息を起し、閏餘を定めたと記してある。星歴を考定すると閏餘を定めるとは曆法に關すること、天體の運行を觀測して、時々閏月を挿入するところの太陰太陽曆を作爲したことを言つたのである。五行を建立し、消息を起すとは、理論に關するもので、消息とは「陰陽の消息を觀る」などいふこともあつて、陰陽といふものと同一である。これは陰陽五行思想を含む十干十二支を年月日時に配當したことを言ふものと思はれる。されば、古來の傳説では、天文学に於ける理論と曆法との二部門が、黄帝の時代に同時に創立されたと言つてゐるのである。黄帝の時代とした

のは神話的の叙述であつて、なほ批判を要することであるが、二つの部門が同時に成立したとするのは、真相を得て居ることであらう。

この理論に於ける五行は、古代肉眼で觀測する時代に知られた惑星の全部であるところの、木火土金の五星と結合し、陰と陽とは月と日とに結合して行る。五星は五歩とも稱せられ、五歩の「歩」と五行の「行」とは、その意義が同一である。五星の中では、木星が最も重要なものとして取扱はれて居り、木星が天を一周する週期を、古曆では十二年として、天の十二區劃に子丑寅卯等の十二支の名稱を附し、木星の所在によつて毎年の吉凶を決定するのである。この十二區劃は十二次と言つて、西方で十二宮といふのに類似して居り、何れも元は一年に十二の朔望月があることによつて天周をその數に平分して、日と月との位置を示すに用ひたのである。そして、木星の週期の年數が恰もこの區劃の數と等しいのによつて、木星をそれに依り込んで思はれる。これが又、木星を尊重する理由となつたものと思はれる。そこで木星紀年法が成立する。他の四惑星の知識は木星の知識に隨伴して生じたものであらねばならぬ。故に、木星紀年法の成立年代を、研究することによつ

て、五行思想の發生年代をも決定することが出来るのである。或る論者は、五行思想を以て、最初には天文と無關係に發生したもので、後に五惑星に結合せられたものであらうと言ふが、それは何等の確證もないことである。五行と天文事項とは、古典に於て、常に同一時代の記事の中に互に連絡して現はれるのである。

五行と陰陽ともまた互に連絡して居る。但し易經では、陰陽のみに限られて、五行がない様ではあるが、易の本文の中には、五行説を背景として居るものがある。また、書經の洪範は、五行のみを説いたものゝ様ではあるが、その中には易筮のことが含まれて居る。易筮は即ち陰陽思想である。然るときは、兩者が連絡して居ない時代は殆ど考へられない。易の起源は伏羲氏の時にあり、五行の起源は黄帝の時にあつたものとすれば、陰陽と五行とはその成立の年代を異にしたものと言はれようが、それらはもはや神話に屬するから、確實な歴史的證據とはならないのである。まして、五行と陰陽とは、共に黄帝の時に作られたといふ記載もあることは、前述の如くである。しかし、思想發達の順序から考へて見れば、陰陽が展開して五行となつたものと言ふことは出来ようが、實際に於ては、陰陽のみが五行

に先だつて説かれて居たといふ形跡がないのである。陰陽が日月に當てられ、五行が五惑星に當てられて居る所から考へれば、これらは必ず同時に出来たものであらう。又、太極は陰陽思想の成立に伴ひ、この二元を統一する爲に發生した觀念と認められる。さて、五行の成立が曆法の成立に伴ひ、陰陽の成立が五行の成立に伴ひ、太極の成立が陰陽の成立に伴つたものとすれば、太極陰陽五行の理論は曆法の成立に伴つて成立したものである。されば、畢竟する所、木星紀年法成立の年代が、天文學成立の年代を決定するものとなる。従つて、古典に於ける太極陰陽五行説も曆法も共に木星紀年法の成立した戰國時代に挿入せられたものと言はねばならぬのである。

この時代に於て、日月五星は支那でもバビロンでも共に占星術の主體となつて居る。太極説や陰陽説や五行説と同種類のものも、西方に存在する。そして、支那では、木星は北極の中樞の邊にある天一と稱する星と連絡せられる。天一は天神中の最も尊貴なるものである。この、木星を最も尊貴なる天神と結合することは、バビロンに於てはマルドク、ペルシヤに於てはアフラマズダ、印度に於てはブリハस्पチ、ギリシヤに於てはゼウス、ローマに於てはジュ

ピクトに結合すること同一である。支那と西方とに、かくの如き共通の事實があるといふことは、また、古代世界の天文学が共通の基礎を有して居たことを思はせるに足りるものである。

支那に於ける天即ち天神の崇拜は、木星の發見によつて、その形態を完成した。それより以前には、原始的なる天神崇拜が必ず存在して居て、更にその上に木星が添加せられたに相違ないであらう。しかし、古典は天文学成立後の記述であるから、それに見える天神崇拜は、みな自ら天文学成立以後の臭味を帯びて居るのである。例へば、易にある「觀天之神道、四時不_レ志、聖人以_三神道設_二教、而天下服_一矣」などがそれである。書經の堯典にある「欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時」もまた同様である。天帝の居を北極とすることや、冬至の日に郊と稱する天帝の祭を行ふことなどは、皆それである。

天文学の理論は、淮南子の天文訓に於て最も詳細に記述してある。ここにその概要を述べれば次の如くである。

天地の分化しない以前は、渾沌たる状態であつたが、それが分れて、軽いものが天となり、重いものが地となつた。天は地上遙かに離れて一層を爲して居る。天

にあるものは圓形の運動をなし、地にあるものは直線の運動をなす。天は陽性の氣、地は陰性の氣であつて、天の氣が下り、地の氣が上り、相互作用し相抱合して萬物となる。陽氣は凝つて火となり、陰氣は凝つて水となる。

それらの精なるものが、天に懸つて日となり月となる。日月から溢れてこぼれ出た精は種々に結合して、惑星及び恒星となる。

天の日月と地の火水とは相對應し、天の五星と地の五行とも亦相對應するものである。天にあるものは地にあるものに影響して、天に或る變化が起れば、地にも必ずこれに應ずる或る變化が生ずる。天子の政治の善悪は常に天に通じ、天の現象に變化を興へて、地上にある萬物の生活に吉凶の結果を生ずる。

この理論は直に人間の發生に適用せられて、人間はその精神として天氣を受け、その肉體として地氣を受け、良心は精神の作用であり、感覺、感情、欲望は肉體の作用であり、地が天に従順であるやうに、肉體が精神に従順であれば、人の行爲は善となり、柔順でなければ悪となると説かれて居る。されば精神もまた一種の物質である。

これは、淮南子の精神訓に見えることである。

古代の天文学の理論は一種の哲學である。その時代には、希臘のそれと同様に、哲學と科學とがまだ分化して居なかつたのである。

思想は哲學の發生を待たないでも存在し得るものであるが、それはなほ原始的のものである。思想がその形態を整へるのは必ず哲學に依らねばならぬ。そこで、天文学の理論が成立した以前に、支那の哲學が成立して居たか否かを考へて見る必要がある。

支那哲學の最も古いものは、易と書經と老子とに於て發見される。書經はその洪範の篇である。易は周の文王と周公と孔子との手によつて書かれたとしてあるもので、その中には、伏羲氏が八卦を作つたことを記して、

仰則觀_ニ象_ヲ於_レ天、俯則觀_ニ法_ヲ於_レ地、觀_ニ鳥獸_ノ之_レ文與_ニ地_ノ之_レ宜、近取_ニ諸身_ヲ、遠取_ニ諸物_ヲ、於是始作_ニ八卦_ヲ。

と言つてあり、又
觀_ニ乎_レ天文、以_レ察_ニ時_ヲ變、觀_ニ乎_レ人文、以_レ化_ニ成_ニ天下_ヲ。

天垂_レ象、見_ニ吉凶_ヲ、聖人象_レ之。

とも言つてある。然るときは、易が天文学成立以後のもの

であること明かであつて、八卦とそれから展開した六十四卦との形を見て占ふのは、天文現象の變化を見て占ふことから脱化したものと言ふことが出来る。そして、易の哲學は天文学の理論と同一であつて、専らその陰陽を主として、それを數學的に取扱ひ、易の組織を構成して居る。

洪範は夏の禹王が天から授けられ、それを傳承した殷の箕子が更に周の武王に授けたものとされて居る。それは、先づ水火山金土の五行を掲げて、宇宙及び人身の原素を示し、その排列を正しくし、その調和を完くすることによつて、儒理を維持し、政治を善良ならしめることを説くものである。君主がそれを一身に體現して、萬民に法則を示せば、萬民がその指導に従つて天下が治まる。この指導の方法を指して王道といふ。王者は常に日月星辰の運行とその變化とに注意して、また卜筮を以て天意を知り、それによつて政治を正しくすることに努力せねばならぬ。この筮といふのは即ち易である。これは全く天文学的政治學である。故に洪範の成立には天文学がその背景となつて居るのである。洪範の五行をば、五星と無關係なものと説く論者もあるが、それは正當な解釋ではない。

老子は孔子と同時代の人も言はれて居て、それは「道」

といふことを説く。その「道」は無名のもの即ち絶對なるものであり、天地に先だつて生ずる混沌たる一氣である。これは又、太一とも稱して、易で言ふ太極と同一である。そして、

道生^レ一、一生^レ二、二生^レ三、三生^レ萬物。萬物負^レ陰而抱^レ陽、沖氣以爲^レ和。

と説く、これは太極陰陽の説である。そして又、

五色令^レ人目盲、五音令^レ人耳聾、五味令^レ人口爽。

と説いて居る。五味は洪範にも見えるもので、

それには、

一曰、五行。一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰

土。水曰^レ潤下、火曰^レ炎上、木曰^レ曲直、金曰^レ從革、土爰

稼穡。潤下作^レ鹹、炎上作^レ苦、曲直作^レ酸、從革作^レ

辛、稼穡作^レ甘。

とある。老子にある五味は即ち洪範にある鹹苦酸辛甘に外ならない。味を五種に數へるのは、色を五種とし、音を五種とするのと共に、みな五行思想の適用であらねばならぬ。されば、老子の思想もまた、太極陰陽五行の哲學即ち天文學の理論を背景として成立して居るのである。老子はその思想の中心として太極を取り、易は陰陽を取り、洪範

は五行を取つた。そこに各自の特色がある。

後世に於ては、宋儒は天文學から遊離した太極陰陽五行の哲學によつて、天地萬物の理を窮めようとして居る。占星術が天文學から遊離した後に出來た一種の占星術といふべき遁甲とか九星とかは、やはり太極陰陽五行を本として數の遊戯に陥つて居る。此の如くして、支那思想は、近世に至るまで、古代天文學の理論に支配されて居るのである。

以上の如く考へ來れば、支那哲學はすべて天文學の理論を背景として居るものである。然るときは、支那哲學の歴史は先づ天文學から説き起さねばならぬ。從來の支那哲學の研究はこの點についての關心が乏しかつたやうである。

支那の天文學の理論が戰國の初期に起つたものとすれば、易も洪範も老子も皆それより後の著作とすべきである。又、孔子の言行録たる論語には哲學がないといふ説も成立し得るであらう。されば、論語を以て最高の人格を具へた孔子の教訓を記したもので、哲學は含まれて居ないとした狄生祖來の意見もまた一顧の價値あるものであらねばならぬ。論語の全體の調子から見れば、實行の教訓であつて、哲學の講説ではない。この教訓は、宋儒がした如く、

後世から哲學的に説明することも出来るであらうが、決して表面に哲學を出して居るものではない。しかし、論語の中に採られた資料の中にも、多少は天文学成立以後のものが入つて居ることは、易に關する記事があることによつても推測される。

支那哲學は天文学から説き起すべく、支那天文学は西方の影響によつて飛躍的に出現したとすれば、支那文化の起源についての眞の解明は、今後の學者の努力に須つべきものが頗る多いこととなるのである。

平田篤胤は易と曆とを以て支那古代文化の最大の産物とし、且つそれを我國の大國主神が發明して支那へ持行かれたものとして、太昊伏羲氏といふのは實は大國主神のことであると論じた。私の論ずる所は、これと全く方向を異にして、東方からと言ふ代りに西方からとしたのである。篤胤の説は想像に充ちて居るものであるが、私は天文学的計算と歴史とを根據として居る。

以上は私の持論である。短い時間に極めて概略のことを申述べたので、或は不明の點もあらうと恐入るのであるが、謹んで大方の批判を仰ぐ次第である。

(了)

次男熙の飛行機にて歸還せるを

佐藤庸也

荒鷲の吾子傷負ひて戦ひつ

赤道を越えけふ歸り來ぬ

五つとせを亞細亞の空に飛ひかひて

たゝかひの傷いえてかへりぬ

隊長と部下をうしなひ淋しけに

かへれる吾子のいくさかたり聞く